

可能という観点から見た日本語の無意志自動詞

呂 雷寧

キーワード 有対(無対)無意志自動詞、可能の含意、動作主の意図、属性に関する可能、認識可能

1. はじめに

無意志自動詞^①は、一般に言われるように、可能の表現形式「(ら)れる」、「ことができる」^②と共起しにくい。例えば、下記の例文における無意志自動詞「混ざる」、「錆びる」、「助かる」はいずれも、「(ら)れる」、「ことができる」を用いて可能の意味を表すことができない。

- (1) a 水と油はよく混ざらない。

(『外国人のための基本語用例辞典』：950)

b *水と油はよく混ざれない。

c *水と油はよく混ざることができない。

- (2) a ファクトリーゼロの製品は海水に浸かっても錆びない樹脂製ベアリングタイヤを使用しています。

(<http://www.factory-zero.co.jp/sonotaframe2.html>)

b *ファクトリーゼロの製品は海水に浸かっても錆びられない樹脂製ベアリングタイヤを使用しています。

c *ファクトリーゼロの製品は海水に浸かっても錆びることができない樹脂製ベアリングタイヤを使用しています。

- (3) (溺れて意識不明な人を見て)

a この人はまだ助かりますか。

(作例)

b *この人はまだ助かれますか。

c *この人はまだ助かることができますか。

このように無意志自動詞が可能表現に使われにくいのは、1つには無意志自動詞自体は可能を含意できるからであると考えられる。本稿では、可能表現とは何か、いかなる無意志自動詞が可能を含意できるのか、また無意志自動詞が

可能を含意することと動作主の意図とがどのように関わるのかといった問題を明らかにする。

2. 先行研究とその問題点

無意志自動詞を可能という観点から考察した研究として、張（1998）、青木（1997）、都築（2001）が挙げられる。

張（1998）は可能を含意する表現を無標識の可能表現と見なし、結果可能表現と名付けている。そして張は、こういった表現は有対自動詞^③表現が主流であり、無対無意志自動詞も結果可能表現になり得るが、有対の場合と同様に、動作主の意図した状態変化が実現できるか否かを表すという条件が満たされなければならないと述べている。張によれば、下記の例文はともに動作主の意図が潜在する結果可能表現であるという。

(4)腕が痛くて手が上がらない。(張1998: 89)

(5)水と油はよく混ざらない。(=(1a))

(4)には動作主の「手を上げる」という意図的動作が潜在しているが、(5)は単に「水と油」の性質を表しているように思われ、「混ぜる」という動作主の意図が関与しているとは考えられない。

青木（1997:12）は自動詞が「(ら)れる」、「ことができる」と共起できるか否かで、それを次の表のように分類している。

	自動詞の例	(ラ)レル	コトガデキル
タイプ1	上がる、止まる、集まる、動く、変わる	○	○
タイプ2	受かる、助かる、育つ、増える、覚める	×	○
タイプ3	決まる、載る、開く、閉まる、広まる	×	×
タイプ4	見える、割れる、折れる、切れる、焼ける	×	×

青木によれば、「(ら)れる」、「ことができる」のいずれとも共起できないタイプ3とタイプ4の自動詞は可能の意味を含意する。そして、タイプ3の自動詞は動作主を含意し、他動詞による可能表現に置き換えても意味内容が変わらない。例えば、次の有対無意志自動詞表現は、青木によれば、他動詞文「ドアが開けられない」に相当するという。

(6) ドアが開かない。

(青木1997: 19)

また青木によれば、タイプ4の自動詞は「-eru」という接辞によって作られる可能動詞と同形で、主体に備わった能力、あるいは「道具」としての役割を表す。例えば、下の(7)は「犬」に備わった「人間よりも遥かに小さな音でも聞こえる」という能力を、(8)は道具である「この包丁」の「何でも切れる」という役割を表すという。

(7) 犬には人間よりも遥かに小さな音でも聞こえる。

(青木1997: 22)

(8) この包丁は何でも切れるが、私には生きた魚が怖くて切れない。

(青木1997: 23)

青木の分類では、タイプ1の動詞は意志自動詞であり、タイプ2、タイプ3、タイプ4の動詞はすべて有対無意志自動詞である。無対無意志自動詞はこの分類から外されているため、可能を含意できると青木が見なしているかどうかは不明である。また、タイプ2の有対無意志自動詞に関してもそれが可能を含意できるかどうかについて青木では言及されていない。

これに対して都築(2001)は、可能を含意できる無意志自動詞は有対無意志自動詞に限られ、無対無意志自動詞は可能を含意できないとしている。そして、可能を含意する有対無意志自動詞には潜在的意志があると述べている。

先行研究には以下のような3つの問題点があると思われる。

①張は可能の表現形式を持たないにもかかわらず、可能を含意する表現を可能表現と称しているが、可能表現は可能を表す形態が含まれる表現に限定されるべきである。

②都築は可能を含意できる無意志自動詞は有対の場合に限られるとしているが、冒頭に挙げた(2a)における「錆びる」は無対無意志自動詞として可能を含意しているように思われる。

③先行研究は無意志自動詞表現に含意されている可能は、必ず動作主の意図したことの実現に関する可能であるとしているが、例えば、張の例文(5)と青木の例文(6)は動作主の意図が関与しているとは考えられず、単に「水と油」、「ドア」の性質を表していると思われる。

以下では、まず可能表現における形態の重要性について述べたうえで、可能表現について定義する。次に、無意志自動詞は有対か無対かにかかわらず、可能を含意することができることを論じる。続いて、無意志自動詞が可能を含意

するのに動作主の意図が関与する場合もあれば、関与しない場合もあるということを指摘する。

3. 可能表現における形態の重要性

可能の形態は可能の意味と同様に、可能表現に欠くことのできない要素である。可能の形態を無視し、意味だけに依拠した張（1998）の理論は妥当ではないと思われる。Jespersen(1958:23)が言うように、「文法家はいずれの面をおろそかにすべきではない、いかなる言語の文法構造も、その全貌を伝えるには機能、形態共に必要だからである」。また、仁田（1997:73）が言うように、文法記述の果たすべき役割は、「文の有している観察可能なく表現形式」を、当の文が担い表したであろう「意味内容」を過不足なく指定できる形で、分析・記述するものでなければならない」。つまり、「文の表現形式と文の意味内容を有機的・統合的に分析・記述する務めが、文法記述には存する」。その中で、形態は「意味内容を統一のあるものにするために、構造化しているのである」。

すべての文法項目の形態と同様に、可能表現の形態も、可能の意味内容を統一のあるものにするために構造化している。そのため、可能表現について文法記述をする際には、可能の意味内容のみならず、可能の形態をも含めた分析・記述が要求される。したがって、可能の形態を持たない表現は可能表現と称されるべきではない。意味だけを可能表現の判断基準とすれば、可能表現の外延が無限に拡大されてしまうととも、可能表現とほかの文法項目との境界線が曖昧となり、概念間の混同を起こしてしまうという問題が生じてくる。

本稿では、可能の形態を持ち、可能の意味を表す表現のみを可能表現と見なし、可能を含意する無意志自動詞表現を可能表現と見なさないことにする。現代日本語について言うと、可能表現はつまり、可能動詞（五段活用動詞の語尾-u → -e-ruの形をとるもの）、動詞の未然形+可能の助動詞「れる／られる」、「できる」、動詞の連体形+「ことができる」、および動詞の連用形+「得る」のいずれかの形態を用いて、有情物・非情物のある事柄または状態の実現が可能か否かという意味を表す表現であると定義する。

4. 可能を含意する有対無意志自動詞

有対無意志自動詞はそれに対応する他動詞があるため、可能を含意する有対

無意志自動詞表現には、動作主の意図がしばしば潜在していると考えられている。しかし実際には、可能を含意する有対無意志自動詞表現には動作主の意図が潜在する場合もあれば、潜在しない場合もある。以下、動作主の意図が潜在する場合と潜在しない場合とに分けて、有対無意志自動詞がいかなる可能の意味を含意できるかについて考察する。

4.1 動作主の意図が潜在する場合

有対無意志自動詞は、しばしば「他動詞の伝える行為や現象が実現した結果」を表す(森田1995:114)。したがって、有対無意志自動詞表現は、そこに動作主の意図が潜在し、動作主の働きかけによって動作の受け手に引き起こされた変化・結果を表すことが少なくない。

動作主の意図が潜在している時、有対無意志自動詞は動作主に関わる可能を含意することができる。これは動作主の能力に関する可能、動作主の動作・状態の実現に影響を及ぼす条件に関する可能に分類される。次の(9)と(10)は前者の例である。

(9)この役柄はあの男には勤まらない。

(『日中辞典』:1253)

(10)女の人は高い声は出るが、低い声は出ない。

(『外国人のための基本語用例辞典』:862)

(9)と(10)はいずれも動作主の意図的な動作によって引き起こされる結果を表している。つまり、「勤める」、「出す」という動作主の動作によって引き起こされる「勤まらない」、「出る／出ない」という結果を表している。したがって、(9)と(10)にはそれぞれそれに対応する以下のような他動詞文が表すのと同じ意味が含意されていると考えられる。

(11)この役柄はあの男には勤められない。

(12)女の人は高い声は出せるが、低い声は出せない。

(11)と(12)はいずれも、動作主の能力を問題にする可能表現である。(11)は習得した能力であるのに対して、(12)は本来備わった能力を表している。したがって、自動詞文(9)、(10)にはそれぞれ習得した能力に関する可能、本来備わった能力に関する可能が含まれていると言えよう。

次に、条件可能を含意する例を見てみよう。

(13) このくすりで毎日目を洗えば、一週間でなおります。

(『外国人のための基本語用例辞典』：41)

(14) のどがいたくて、食事が通らない。

(『外国人のための基本語用例辞典』：799)

上の例文はいずれも、ある一定の条件下で動作主の動作によって引き起こされる結果を表している。その結果とは、(13)について言う、「このくすりで毎日目を洗う」という条件下で、動作主の「なおす」という動作によって生じる「なおる」という結果である。したがって、(13)、(14)は下記の他動詞文によって表された意味を含意していると考えられる。

(15) このくすりで毎日目を洗えば、一週間でなおせます。

(16) のどがいたくて、食事を通せない。

これらは両方とも可能表現である。この2つの文で問題とされているのは、「なおせる」、「通せる」という能力ではなく、「このくすりで毎日目を洗う」、「のどがいたい」という条件である。(15)は動作主の外的条件⁽⁴⁾に関する可能表現であり、(16)は動作主の内的条件に関する可能表現である。したがって、(15)に対応する自動詞文(13)は動作主の外的条件に関する可能を含意し、(16)に対応する自動詞文(14)は動作主の内的条件に関する可能を含意していると考えられる。

4. 2 動作主の意図が潜在しない場合

この場合の有対無意志自動詞は、動作主の意図が関わっておらず、事物の属性に関する可能、あるいは認識可能⁽⁵⁾を含意することができる。下の①で事物の属性に関する可能の含意、②で認識可能の含意について見てみる。

①事物の属性に関する可能の含意

有対無意志自動詞は事物の属性に関する可能を含意することができる。事物の属性には様々な属性があると考えられるが、本稿では事物の属性を、事物の本来の性質、機械などの性能、事物に対する評価・事物の価値に大きく3分類する。例えば、下記の(17)~(19)はいずれも事物の属性を表していると考えられる。(17)は「0℃になったら凍る」という「水」の本来の性質を、(18)は「時速100キロで走ることができる」という「この車」の性能を、(19)は人間にとって「食べられる」という「この茸」の価値を表している。

(17)水は0℃になったら凍る。

(作例)

- (18)この車は時速100キロで走ることができる。 (作例)
 (19)この茸は毒がないから食べられる。 (作例)

有対無意志自動詞は上記の3種類の属性に関する可能を含意することができると考えられる。まず、本来的性質に関する可能を含意する例文を見てみよう。

- (20)水と油はよく混ざらない。 (= (1a))
 (21)飛行機の窓は開かない。 (作例)

「混ざる」、「開く」はともに有対無意志自動詞であるため、しばしば「混ぜる」と「開ける」という動作主の意図的動作によってもたらされる物事の変化を表すと思われがちである。しかし、(20)、(21)は可能の意味を含意しているが、いずれも動作主の意図は関与していないと思われる。これらの文においては、動作主が一般化されたことによって、「混ぜる」と「開ける」という意図的動作の存在は薄れてしまい、問題とされていない。森田(1988:87)によれば、(20)は動作主が「実現しようと試みたが不可能だった」という意味ではなく、「その事物の有している属性や現状の説明である」。つまり、(20)によって表されているのは、誰かの「混ぜる」意図した「混ざる」という状態変化にならないという意味ではなく、「水と油」の「混ざらない」という性質である。この性質には人間の意図が関与できない。(21)も同様に、誰かの「開ける」能力がない、または、誰かの「開ける」ことが許可されないといった意味を表しているのではなく、「飛行機の窓」の「開かない」という属性を表している。

動詞「混ざる」は、事物にある変化が生じる意味合いを帯びている動詞⁶⁾である。ゆえに、「水と油」の「混ざらない」という属性は、「水と油」に「混ざる」という状態変化が実現不可能であるということを示している。したがって、(20)には、「水と油」の「混ざらない」という本来的性質が成立可能か否かという意味が含意されていると考えられる。同様に、「飛行機の窓」が「開かない」という属性を有することを表す(21)には、「飛行機の窓」の「開かない」という本来的性質が成立可能か否かという意味が含意されていると考えられる。つまり、(20)と(21)には、事物の本来的性質に関する可能が含まれているということになる。

次の(22)と(23)もすべて属性に関する可能を含意していると思われる。(22)に含まれているのは、「このカメラ」という機械の「よく写る」という性能に関する可能、(23)に含まれているのは「この野球場」に対して「五万人入る」という

評価、あるいは「この野球場」の人間にとって「五万人入る」という価値に関する可能である。

②このカメラはよく写る。 (作例)

③この野球場は五万人入る。 (作例)

このように、有対無意志自動詞は動作主の意図が潜在しない場合には、事物の属性に関する可能を含意することができる。具体的には、事物の本来の性質に関する可能、機械などの性能に関する可能、事物に対する評価・事物の価値に関する可能を含意することができる。

②認識可能の含意

有対無意志自動詞は、そこに動作主の意図が潜在しない場合、ある事柄の成立が可能か否かという認識上の可能性の有無、つまり認識可能を含意することもある。次の例文を見てみよう。

④あの車は何回も事故に遭って、もう直らない。 (作例)

⑤この荷物は大きすぎて、たぶん車に入らない。 (作例)

⑥(溺れて意識不明な人を見て) この人はまだ助かりますか。 (= (3a))

上記の例文における「直る」、「入る」、「助かる」は、動作主の意図が読み取れないため、動作主の「直す」、「入れる」、「助ける」という動作の結果を表すとは考えられない。例えば、④について言うと、誰かが意図的に「あの車」を直そうとして試みた結果、直るという状態変化を実現できないという意味ではなく、「何回も事故に遭った」「あの車」を見て、直る可能性がないという話者の推測である。⑤、⑥についても同様なことが言える。これらの文は単に事柄の状態が成立可能か否かについての話者の判断を表していると考えられる。すなわち、事物が「入る」、「直る」、「助かる」という状態になる可能性があるか否かについての話者の判断である。したがって、④～⑥には、「あの車」が「直る」可能性がない、「この荷物」が「車に入る」可能性がない、「この人」が「助かる」可能性があるかどうか、という意味、つまり認識可能が含まれていると言える。

このように、有対無意志自動詞は動作主の意図が潜在するか否かにかかわらず、可能を含意することができる。動作主の意図が潜在する場合には動作主の能力に関する可能、あるいは動作主の動作・状態の実現に影響を及ぼす条件に関する可能を含意することができるのに対して、動作主の意図が潜在しない場

合には事物の属性に関する可能、あるいは認識可能を含意することができる。

5. 可能を含意する無対無意志自動詞

無対無意志自動詞も可能を含意することができる。そして、有対無意志自動詞と同様に、動作主の意図が潜在する場合もあれば、潜在しない場合もある。以下の5.1節と5.2節では、動作主の意図が潜在する場合と潜在しない場合に、それぞれいかなる可能の意味が含意されるかについて見てみる。

5.1 動作主の意図が潜在する場合

動作主の意図が潜在する場合に、有対無意志自動詞と同様に無対無意志自動詞も、動作主の能力に関する可能、あるいは動作・状態の実現に影響する条件に関する可能を含意することができる。以下、この2つの意味を含意する無対無意志自動詞表現について見てみよう。

- ⑲ 彼が参加すれば、物事がうまく運ぶ。 (作例)
 ⑳ 頭が痛いので、勉強が捗らない。 (作例)
 ㉑ もう少し説明してもらえば、納得がいく。 (作例)

⑲は「彼」の「参加する」という意図の行為で、「物事がうまく運ぶ」という結果が生じることを表している。この文には、「彼」は能力があるがために、「物事がうまく運ぶ」という結果の実現が可能であるという意味が含意されていると考えられる。言い換えれば、この文は動作主「彼」の能力に関する可能を含意している。

これに対して、⑳と㉑では問題とされているのは事柄を実現させる動作主の能力の有無ではなく、事柄の実現に影響を及ぼす条件である。⑳は「頭が痛い」という原因で、「勉強が捗らない」という結果が生じることを表す。この文には、動作主が「勉強する」という動作を行なって、「頭が痛い」という内的条件により、「捗る」結果が成立不可能ということが含意されていると考えられる。したがって、⑳には動作主の内的条件に関する可能が含まれていると言えよう。同様に㉑には、「もう少し説明してもらおう」という外的条件で、「納得がいく」結果が成立可能であるということが含意されている。つまり、動作主の外的条件に関する可能が含まれていることになる。

5. 2 動作主の意図が潜在しない場合

動作主の意図が潜在しない場合、無対無意志自動詞は有対無意志自動詞と同様に、事物の属性に関する可能、あるいは認識可能を含意することができる。

①事物の属性に関する可能の含意

まず、事物の本来的性質に関する可能を含意する無対無意志自動詞表現について見てみよう。

③0 ファクトリーゼロの製品は海水に浸かっても錆びない樹脂製ベアリングタイヤを使用しています。 (= (2a))

③1 水は百度で沸騰する。(寺村1982: 269)

③0における「錆びる」と③1における「沸騰する」は無対無意志自動詞で、それぞれ「樹脂製ベアリングタイヤ」と「水」の本来的性質を表している。「錆びる」と「沸騰する」は変化を帯びている動詞であるため、③0と③1はそれぞれ「錆びる」という変化の実現が可能か否か、「沸騰する」という変化の実現が可能か否かを含意していると考えられる。したがって、③0、③1にはそれぞれ「樹脂製ベアリングタイヤ」の「錆びない」という本来的性質の成立が可能か否か、「水」の「沸騰する」という本来的性質の成立が可能か否かという意味が含意されている。つまり、③0と③1には本来的性質に関する可能が含まれていることになる。

無対無意志自動詞はまた、機械などの性能に関する可能、あるいは事物に対する評価・事物の価値に関する可能も含意することができる。

③2 この製氷機は従来の半分の時間で水が凍る。(作例)

③3 7日間脂肪燃焼スープダイエットは本当に痩せるのか？

(<http://ameblo.jp/petitebeauty/entry-10006407700.html>)

③2、③3はいずれも可能を含意していると思われる。③2は「この製氷機」という機械の「従来の半分の時間で水が凍る」という性能を表している。その中に、「従来の半分の時間で水が凍る」という性能が成立可能か否かという意味が含まれていると考えられる。③3は「7日間脂肪燃焼スープダイエット」という物が人間にとって、「痩せる」という価値があるか否かを表している。したがって、③3には事物の評価・価値に関する可能が含まれていると考えられる。

寺村(1982: 269)は、動詞の現在形が、「主体の一時的な動作・作用(『アト一分グライデ沸騰スル』)を表わす場合と、恒常的な作用(『水ハ百度で沸騰スル』)

ル) の場合がある」とし、「恒常的に使われると、それらの述語は、その主体の属性を表わすことになる。あるものにとって、あることが可能だというのが恒常的であれば、それは、その主体がそういう『能力をもっている』ということを表わす」と述べている。これは無意志自動詞表現には属性可能が含意される場合があるという本稿の考えを裏付けることになろう。ただし、寺村は事物の「性質」を「能力」と称しているのに対して、本稿はそれを有情物の能力と区別し、別々に扱っている。

② 認識可能の含意

次は認識可能を含意する無対無意志自動詞表現の例である。

③④彼は今にきっと大物になる。(鈴木1996: 131)

③⑤子どもは水が大好きですが、環境に水があることで溺水も発生します。小さな子どもでは、バケツ、ビニールプール、洗濯機などでも溺れます。要するに、鼻と口を覆うだけの水があれば溺れるのです。

(<http://safekids.ne.jp/childaccidentreport/report15.html>)

③④と③⑤には可能の意味が生じていると思われる。鈴木(1996: 131)によれば、③④は予測のニュアンスをともなった未来の実現を表すが、同時に、それは現在の「彼」がその可能性を持っていることをも表すという。換言すれば、③④は「彼」に「大物になる」可能性があるか否かについての話者の推測を表している。したがって、③④には、話者の判断により、「彼」が大物になる可能性があるという認識可能の意味が含意されていると考えられる。同様に、③⑤には「子ども」の「溺れる」可能性があると認識可能が含まれていると考えられる。

以上の考察から分かるように、無対無意志自動詞も動作主の意図が潜在するか否かにかかわらず、可能を含意できる。そして、無対無意志自動詞も有対無意志自動詞と同様に、動作主の意図が潜在する場合には動作主の能力に関する可能あるいは事柄の実現に影響を及ぼす条件に関する可能を、動作主の意図が潜在しない場合には属性可能あるいは認識可能を含意することができる。

6. おわりに

以上で論じたように、無意志自動詞は可能の意味を含意することができる。これは無意志自動詞が可能表現になりにくい理由の一つである。しかし、次の

(36b)と(37b)に示すように、無意志自動詞は「ことができる」という表現形式を用いて可能を表す場合がある。

- (36) a *温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が20度を少し下回ってようやく咲ける。
 b 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が20度を少し下回ってようやく咲くことができる。

(www.nhk.or.jp/sawayaka/ishigaki.html)

- (37) a *娘が無事に卒園することができ、そして、ここまでのびのびと大きく育てたのは香嵐溪の大自然のおかげかもしれない。
 b 娘が無事に卒園することができ、そして、ここまでのびのびと大きく育つことができたのは香嵐溪の大自然のおかげかもしれない。(作例)

いかなる無意志自動詞が可能の表現形式を用いて可能の意味を表すことができるのか、無意志自動詞が可能表現に使われる場合にいかなる条件が必要であるのか、また、どのような可能の表現形式と共起できるのかといった問題を今後の課題とする。

注

- (1) 仁田 (1988) は無意志動詞について次のように定義している。

自己制御性とは、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質である。自己制御性を持った動詞が意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞がいわゆる無意志動詞である。(p35)

本稿では、この定義に従い、自己制御性を持たない自動詞を無意志自動詞であるとする。

- (2) 本稿では、可能動詞 (五段活用動詞の語尾-u→-e-ruの形をとるもの)、動詞の未然形+可能の助動詞「れる/られる」、および「できる」を合わせて「(ら)れる」と総称し、動詞の連体形+「ことができる」を「ことができる」と略称することにする。可能を表す形式には「(ら)れる」と「ことができる」以外、「得る」もある。「得る」は「あり得る」、「起り得る」などのような決まった言い方以外、ほとんど使われず、標準語において「生産性を持たないいうえに、文章語的なニュアンスを持つ」(渋谷1986:107-108)。

- したがって、本稿は「得る」を研究対象外とする。
- (3) 形態的・意義的・統語的に対応する他動詞を持つ自動詞は、西尾（1978）では「対立する他動詞を持つ自動詞」と呼ばれ、早津（1987）では「有対自動詞」と呼ばれている。本稿は早津に従う。そして、対応する他動詞を持つ無意志自動詞を有対無意志自動詞と称し、対応する他動詞を持たない無意志自動詞を無対無意志自動詞と称する。
- (4) 本稿は森田（1987:478）に従い、外的条件は周囲の情勢や規則などの条件で、内的条件は心理的または肉体的条件である。
- (5) 金子（1980）は日本語の可能に“みこみ”の存在を問題にする「認識の可能」があるとしている。金子（1981）では、これが「認識可能」と称される。本稿は金子（1981）に従う。
- (6) 工藤（1995）は、「混ざる」、「開く」のような動詞を「ものの無意志的な（状態・位置）変化動詞」と称している。

付記：本稿は第4回日本語教育研究会で口頭発表した「日本語の無意志自動詞について—可能という観点から—」を加筆修正したものである。

参考文献

- 青木ひろみ（1997）「《可能》における自動詞の形態的分類と特徴」『神田外語大学大学院紀要言語科学研究』33 pp.11-26
- Jespersen O.他（1959）『英語学ライブラリー 36 形態か機能か』 W.F.Leopold、O.Jespersen、C.E.Bazell著 佐藤一夫訳 研究社
- 金子尚一（1980）「可能表現の形式と意味（I）—“力の可能”と“認識の可能”について—」『共立女子短期大学紀要（文科）』第23号pp.62-76
- （1981）「能力可能と認識可能をめぐって—非情物主語ということ—」『教育国語』65 pp.103-112
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 渋谷勝己（1986）「可能表現の発展・素描」『大阪大学日本学報』5 pp.101-136
- 鈴木重幸（1996）『形態論・序説』むぎ書房
- 張 威（1998）『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から—』くろしお出版
- 都築順子（2001）「日本語の『可能の意味を含む自動詞』に関する一考察—中国

- 語との比較対照において」『日本文化論叢』蔡全勝主編 大連理工大学出版社
- 寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味』I くろしお出版
- 西尾寅弥 (1978)「自動詞と他動詞における意味用法の対応について」『国語と国文学』55- 5 東京大学国語国文学会 至文堂 pp.173-186
- 仁田義雄(1988)「意志動詞と無意志動詞」『月刊言語』17- 5 大修館書店 pp.34-37
- (1997)『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』くろしお出版
- 早津恵美子 (1987)「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』7 京都大学言語学研究会 pp.79-109
- 森田良行 (1987)『角川小辞典 7 基礎日本語 I』角川書店
- (1988)『日本語の類意表現』創拓社
- (1995)『日本語の視点—ことばを創る日本人の発想—』創拓社
- 呂 雷寧 (2005)『現代日本語における可能表現の研究』名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士論文

例文出典

- (1) 辞典
『外国人のための基本語用例辞典』(第二版) (1975) 文化庁著 大蔵省印刷局
『日中辞典』(第二版) (2002) 共同編集:北京・对外経済貿易大学、北京・商務印書館、小学館 小学館出版
- (2) 検索エンジン (検索期間:2004年4月1日~2005年12月20日)
Google (<http://www.google.co.jp/>)